

「 MQL 5 ; 翻訳まとめ (その 2) iMA と iADX 」 翻訳のみ実施 2011.11.15

注意 ; ・本資料は、まだ MT 5 での動作・検証を行っていません、
近々の検証用資料として、英文資料を意識しながら纏めたもの (メモ) です。
・以上の状況を理解されたうえで、本稿内容を参照ください。

目次 :

1 . E A やスクリプトで用いる場合例	
(1) 事前解説を要する関数	
CopyBuffer()関数	P 1
(2) iMA データを利用する	P 2
(3) iADX データを利用する	P 3
2 . インディケータを表示する例	
(1) 事前解説を要する関数	
OnCalculate()関数	P 4
BarsCalculated()関数	P 5
(2) iMA インディケータを表示する	P 5
(3) iADX インディケータを表示する	P 7

1 . E A やスクリプトで用いる場合 (例)

(1) 事前解説を要する関数

CopyBuffer()関数

用途 ; インディケータ用のバッファから、コピー先 (プログラムで使用可能な) 配列にデータをコピーする。

戻り値 (return);

正常終了時はコピーしたデータの数、
エラーの場合は「 -1 」

指定方法は、3 通り可能。(C++ のオーバーライド);

CopyBuffer (インディケータハンドル、バッファ No、スタートポジション、個数、コピー先の配列)

CopyBuffer (インディケータハンドル、バッファ No、スタート日時、個数、コピー先の配列)

CopyBuffer (インディケータハンドル、バッファ No、スタート日時、ストップ日時、コピー先の配列)

(2) iMAデータを利用する

MQL4の場合とは異なり、「iMA」で直接に移動平均値が返されるのでは無いことに注意。

呼出手順 (概要);

インディケータ・ハンドル、バッファ配列を定義
 iMAでは、必要なハンドル数=1、必要なバッファ数=1
 バッファ No=「0」のみ
 インディケータ用のハンドルを設定
 インディケータ・データをバッファ (配列) にコピーする
 配列の内容 (データ) が利用可能となる
 インディケータ用のハンドルを開放する

コード基本構成 (例);

```

グローバル領域
    double ema[];
    int Handle;
    int period=21;
OnInit()
{
    Handle=iMA(_Symbol,_Period,period,MODE_EMA,PRICE_CLOSE);
    //Handle=iMA(NULL,0,21,MODE_EMA,PRICE_CLOSE); でも良い
}
OnTick()、OnStart()など
{
    ArraySetAsSeries(ema,true);
    CopyBuffer(Handle,0,0,10000,ema);
    // CopyBuffer(ハンドル名, バッファ No, スタート位置, 北°-個数, 配列名);
    配列データを利用する
    double ema_10=ema[10];
    . . . . .
}
OnDeinit()
{
    IndicatorRelease(Handle);
}

```

(3) iADXデータを利用する

MQL4 の場合とは異なり、「iADX」で直接に移動平均値が返されるのでは無いことに注意。

呼出手順 (概要);

インディケータ・ハンドル、バッファ (配列) を定義

iADX では、必要なハンドル数=1、必要なバッファ数=3

バッファ No	ライン種類
0	MAIN_LINE
1	PLUSDI_LINE
2	MINUSDI_LINE

インディケータ用のハンドルを設定

インディケータ・データをバッファ (配列) にコピーする

配列の内容 (データ) が利用可能となる

インディケータ用のハンドルを開放する

コード基本構成 (例);

グローバル領域

```
double ADX[],Dip[],DIIm[];
```

```
int Handle;
```

```
int period=14;
```

```
OnInit()
```

```
{
```

```
    Handle=iADX(_Symbol,_Period,period); //Handle=iADX(NULL,0,14);でも OK
```

```
}
```

```
OnTick()、OnStart()など
```

```
{
```

```
    ArraySetAsSeries(ADX,true);
```

```
    ArraySetAsSeries(Dip,true);
```

```
    ArraySetAsSeries(DIIm,true);
```

```
    CopyBuffer(Handle,0,0,10000,ADX);
```

```
    CopyBuffer(Handle,1,0,10000,Dip);
```

```
    CopyBuffer(Handle,2,0,10000,DIIm);
```

```
    // CopyBuffer(ハンドル名, バッファ No, スタート位置, 本数, 配列名);
```

配列データを利用する

```
    double adx_10=ADX[10];
```

```
    double dip_10=Dip[10];
```

```
    double dim_10=DIIm[10];
```

```
    . . . . .
```

```
}
```

```
OnDeinit()
```

```
{
```

```
    IndicatorRelease(Handle);
```

```
}
```

2 . インディケータを表示する例

(1) 事前解説を要する関数

OnCalculate()関数

用途 ; インディケータの表示に使用する。(専用)

特徴 ; インディケータ表示に最低限必要なデータが、直接(1ステップで)呼び出せる様に準備されている。

指定方法は、2通り可能。(C++のオーバーライド);

< 第1形式 > ・ ・ 表示に必要なバッファ数が「1個」の場合専用

```
int OnCalculate (
    const int rates_total,          // size of the price[] array
    const int prev_calculated,     // bars handled on a previous call
    const int begin,               // where the significant data start from
    const double& price[]         // array to calculate
) { . . . . . }
```

引数の意味 ;

- ・ rates_total ; 総足数に等しい
- ・ prev_calculated ; 前回「OnCalculate()」がコールされた時に指標の計算が終わっていた足数
- ・ begin ; 計算をスタートする足
- ・ price[] ; 表示(計算)対象のデータが入った配列

< 第2形式 > ・ ・ 表示に必要なバッファ数が「複数個」の場合(1個の場合も使える)

```
int OnCalculate (
    const int rates_total,          // size of input timeseries
    const int prev_calculated,     // bars handled in previous call
    const datetime& time[],        // Time
    const double& open[],          // Open
    const double& high[],          // High
    const double& low[],           // Low
    const double& close[],         // Close
    const long& tick_volume[],     // Tick Volume
    const long& volume[],          // Real Volume
    const int& spread[]            // Spread
) { . . . . . }
```

引数の意味 ;

- ・ 「rates_total」と「prev_calculated」は、第1形式の場合と同様
- ・ その他の「Close、volume」等は、指標計算に用いる「series」データEA、Scriptの場合と異なり、上記の引数データは直接呼び出すことができる。

BarsCalculated()関数

用途 ; インディケータの準備が出来たかの判定に使用する。

```
int BarsCalculated(
    int indicator_handle,    // indicator handle
);
```

(使用例)

```
int is_data_ready=BarCalculated(インディケータ・ハンドル);
```

戻り値 ; ・ インディケータ・ハンドルが設定された直後のインディケータ・バッファ中の計算済みデータ数。
 ・ まだ計算が始まっていない場合は「-1」を返す。

(2) iMAインディケータを表示する

- ・ 「EA、Scirpt」の場合とは、データ呼出手順が異なる場合あり

呼出手順 (概要);

インディケータ・ハンドル、表示用バッファ配列を定義

iMA では、必要なハンドル数=1、必要なバッファ数=1 (バッファ No= 「 0 」 のみ)

インディケータ用のバッファを設定、「Series」データとして設定、

ハンドルを設定

インディケータ・データをバッファ (配列) にコピーする

表示を円滑にするためには、計算済みデータの再計算を回避する必要あり

配列の内容がインディケータとして表示される

コード基本構成 (例);

インディケータ表示の「最小コード」例

```
//#property indicator_chart_window //別ウインドウに表示する場合
#property indicator_buffers 1
#property indicator_plots 1
// インディケータ用バッファ・ハンドル・MA 計算周期
double MABuffer[];
int handle;
int period=21;
//
void OnInit()
{
```

```

SetIndexBuffer(0,MABuffer,INDICATOR_DATA);
ArraySetAsSeries(MABuffer,true);
handle=iMA(NULL,0,period,0,MODE_EMA,PRICE_CLOSE);
return(0);
}
//
int OnCalculate(
    const int rates_total,
    const int prev_calculated,
    const datetime &time[],
    const double &open[],
    const double &high[],
    const double &low[],
    const double &close[],
    const long &tick_volume[],
    const long &volume[],
    const int &spread[] )
{
//---- 指標表示のための最小記述
// ( A ) 全てのデータを表示に度に計算する場合例
    int copied=CopyBuffer(handle,0,0,rates_total,MABuffer);
//---- 次のコールのために計算済み足数を返す
    return(rates_total);
}

```

(A) 部 ; 計算済みデータの再計算を行わないためには、例えば下記の記述方法あり

```

if(BarsCalculated(handle)<rates_total) return(0);
//
int to_copy;
if(prev_calculated>rates_total || prev_calculated<=0) to_copy=rates_total;
else
{
    to_copy=rates_total-prev_calculated;
    to_copy++;
}
//
CopyBuffer(handle,0,0,to_copy,MABuffer);
//

```

インディケータ表示の場合「 OnCalculate (. . .) { * * * } 」を使用する、
 この場合は、計算済み足数や、終値など、(. . .) 内に設定されたデータは、
 下記の様に**直接呼び出すことができる**。

```

int counted_bars=prev_calculated;
double Close=close[i]、double Open=open[i]、int spread_=spread[i] など

```

(3) iADXインディケータを表示する

- ・「EA、Scirpt」の場合とは、データ呼出手順が異なる場合あり

呼出手順 (概要);

インディケータ・ハンドル、表示用バッファ配列を定義

iADX では、必要なハンドル数=1、必要なバッファ数=3

バッファ No	ライン種類
0	MAIN_LINE
1	PLUSDI_LINE
2	MINUSDI_LINE

インディケータ用のバッファをそれぞれ設定、

「Series」データとしてそれぞれ設定、ハンドルは1つ設定

インディケータ・データをそれぞれバッファ (配列) にコピーする

表示を円滑にするためには、計算済みデータの再計算を回避する必要あり

配列の内容がインディケータとして表示される

コード基本構成 (例);

インディケータ表示の「最小コード」例

```
#property indicator_chart_window
#property indicator_buffers 3
#property indicator_plots 3
// インディケータ用バッファ・ハンドル・ADX 計算周期
double ADX_Buffer[];
double Dlp_Buffer[];
double Dlm_Buffer[];
int handle;
int period=14;
//
void OnInit()
{
    SetIndexBuffer(0,ADX_Buffer,INDICATOR_DATA);
    SetIndexBuffer(0,Dlp_Buffer,INDICATOR_DATA);
    SetIndexBuffer(0,Dlm_Buffer,INDICATOR_DATA);
    //
    ArraySetAsSeries(ADX_Buffer,true);
    ArraySetAsSeries(Dlp_Buffer,true);
    ArraySetAsSeries(Dlm_Buffer,true);
    //
    handle=iADX(NULL,0,period);
    return(0);
}
//
```

```

int OnCalculate(
    const int rates_total,
    const int prev_calculated,
    const datetime &time[],
    const double &open[],
    const double &high[],
    const double &low[],
    const double &close[],
    const long &tick_volume[],
    const long &volume[],
    const int &spread[] )
{
//---- 指標表示のための最小記述
// ( A ) 全てのデータを表示に度に計算する場合例
CopyBuffer(handle,0,0,rates_total,ADX_Buffer);
CopyBuffer(handle,1,0,rates_total,Dlp_Buffer);
CopyBuffer(handle,2,0,rates_total,DIm_Buffer);
//---- 次のコールのために計算済み足数を返す
return(rates_total);
}

```

(A) 部 ; 計算済みデータの再計算を行わないためには、例えば下記の記述方法あり

```

if(BarsCalculated(handle)<rates_total) return(0);
//
int to_copy;
if(prev_calculated>rates_total || prev_calculated<=0) to_copy=rates_total;
else
{
    to_copy=rates_total-prev_calculated;
    to_copy++;
}
//
CopyBuffer(handle,0,0,to_copy,ADX_Buffer);
CopyBuffer(handle,1,0,to_copy,Dlp_Buffer);
CopyBuffer(handle,2,0,to_copy,DIm_Buffer);
//

```

以上